

talk! talk! talk! スポーツライター・青島健太さん



スポーツライター

青島健太さん

プロスポーツ界の今をクールな視点で見つめながら、スポーツの真の楽しみを伝えてくださる青島健太さん。爽やかで明瞭な口調や誠実な人柄で見る者に元気を与え、キャスターとしても絶大な人気を誇る。

野球選手時代の経験やご自身のスポーツ哲学を少年のように瞳を輝かせながら熱っぽく語ってくださった青島さん。取材時に使われるデジタルカメラとのつき合い方を含め、幅広くお話をおうかがいした。

プロフィール

あおしま・けんた。1958年、新潟県新潟市生まれ。埼玉県草加市で育ち、小学生の頃より野球を始める。春日部高校から慶應義塾大学へ進学、野球部主将として活躍する。1979年に東京六大学秋季リーグでは、1シーズンに6本塁打、22打点という新記録を樹立。1981年、東芝に入社、強打の大型三塁手として名を馳せる。1983年には社会人野球都市対抗優勝、オールジャパンにも2回選出される。1984年、ヤクルトスワローズに入団。翌年のデビュー戦では史上20人目の初打席初本塁打を記録した。1989年に引退、その後日本語教師としてオーストラリアに渡る。帰国後はこれまでの経験を生かしスポーツライター、キャスターに転身。現在は大学の非常勤講師も勤めている。

当たり前で試合に挑んだ学生時代 自主性を育むのは実践の場

まず、野球との出会いについて聞かせてください。

小学校に入ってからすぐです。当時は、男の子がするスポーツといえば野球でしたから。やっぱり僕らの世代には、ジャイアンツの影響力が圧倒的でしたよね。王さん、長嶋さんに憧れて、実際にチームに入ったのは4年生のときです。そのま、当たり前のように中学校でも野球部に入って野球をしていました。

高校に入学されたとき、一度は野球から離れようと思ったとおうかがいしたのですが？

家族の勧めもあって、進学校に入って勉強に専念しようと思ったんです。実は中学のときに野球をしに来ないかと強豪の高校から誘いがあったんです。それを蹴ってまで入学した高校ですから、きっぱり止めようと思っていたのですが、結局我慢できずに野球を始めてしまいました。僕が入学したときには2、3年生合わせて10人という小さなチームだったのですが、それでも野球が楽しくてしかたありませんでしたね。

ですが、最終的には埼玉県代表になるぐらいの強豪チームになりましたよね。

そうですねですよ。いろいろとラッキーなことが重なったのでしょうか。たまたま僕の学年で16人の入部があって、しかもそれなりに野球のできるヤツが集まったんです。上級生が少なかったので、すぐにレギュラーになることができました。早いうちから実践で練習を積むことができたんです。

実践を積むことが上達につながるのですか？

野球をやりたくてチームに入ったのに、試合をさせてもらえないままキャッチボールや素振りばかりやっていたら、嫌気がさしてくるじゃないですか。もちろん、そういう個別練習はすごく重要なことなんですけど、野球のゲームを楽しみたいから野球をやっているのであって、誰も素振りをやりたいわけではありませんよね。アメリカのコーチング（注1）でも、選手に最も必要なのは実践、つまりプレイングタイム（playing time）だという考え方があります。

実践の中で技術が身につくということですか？

というよりも、ゲームの最中にバットがボールに全然当たらないという体験をすれば、当てられるように、飛ばせるようにするにはどうすればいいのかな、練習でこうすればいいのかなというふうな考えでしよう。監督やコーチにやらされてるのではなく、自ら主体的に練習メニューに取り組むことができるようになると思うんです。

自主的に取り組めば、楽しいうえに伸びも速いでしょう。そういう考え方がもっと日本でも広がったら良いなと思いますね。実際、僕らの能力が良い方向に引き出されたのも、最初からどんどん試合に出る場を与えてもらったからというのもあると思います。

※注1

コーチング＝アメリカで生まれた「自発的な気持ちによる、自主的な行動を促し、目標達成をサポートする」ためのコミュニケーション方法。心理学、成功哲学、行動科学、接遇学などが融合された総合的な社会的技術として確立されている。このコーチングを身につけたプロフェッショナルをコーチという。



全ての野球少年の夢、プロ野球界入りを実現 「自分ひとり、なにをやっても食べていける」

高校卒業後、大学野球、社会人野球と進み、27歳でプロ野球界へと入られたわけですよね。

社会人野球の世界に入って1年目に都市対抗で準優勝、3年目は優勝したんです。3年間のうち2回の決勝進出という結果に、野球はもう十分だと感じました。それよりもむしろ仕事に集中したかったんです。その当時は午前中は仕事、午後には練習という毎日の繰り返しでした。ですから、会議の内容もちんぷんかんぷん、仕事が途中で時間が来ると「すみません、練習行ってきます」と言って練習に出なければならぬ……。いつかは野球を辞めるときが来るのに、いつまでもこんなことをやっていたらどんな仕事で遅れをとってしまう。仕事に対する焦りが頭をもたげてきたんです。

4年目に入って野球をやめよう決心しました。「野球をするのもこれで最後だ」と背水の陣をしき、最後の大会に向けて自分なりに本気で練習に取り組みました。ところが今度はそれが自信となり、これだけやったんだから次に進みたい、とことんまでやってみたいという欲求が出てきてしまったんです。

それでプロ入りを決心したのですね。

社会人野球を辞めるのは相当の覚悟がいりました。当時は終身雇用が当たり前だったでしょう。安定を保証してくれる大手企業から外れるというのは、すごく勇気がある決断でした。先輩や上司にも止められましたし、やはり無理かなという不安との葛藤が

りました。でも最終的に、「体は健康だし、もしプロがだめになっても自分1人が食べていくな、力仕事でも何でもやればいじゃないか」と考えたら、もやもやしたものが吹っ切れたんです。すごく楽になって「よし、やってみよう」と決意することができました。



実際にプロになってみていかがでしたか？

プロの世界は24時間が勝負なんです。あまり知られていないけれど、プロ野球選手というのは、朝走って練習をして、ナイトゲームの後にまた素振りやバッティング練習をしているのです。夜中の1時や2時までウエイトトレーニングをしている選手もいるんですよ。24時間野球のことを考え、自分にシビアな練習を課し、こなすことを脳に植えつける。それは、想像以上につらく厳しいことです。そういう精神状態で自分を持ってゆくまでの強靱な意志を持つこと。プロに入ってみて、それがよくわかりました。だから辞めるときも決断は速かったですね。

プロの厳しさというのは想像もつかないほどなのでしょうね。

そんなことはないです。ただ、プロに入るまでにも、もう限界だと思うところまで練習をしていました。ですが、プロはその限界の向こう側にいかなければならなかったんです。

なるほど。限界を超えたとところに存在するのがプロだった。

だと思います。気合いや意気込みだけでは、とうてい達することができないステージでしたね。当然ながらやる気だけで150kmの球は打てませんからね。「いくぞ、来い！」と気合いを入れた瞬間には、すでに球はミットの中なんですから(笑)。さらに技術的にハイレベルな領域、さらに本能的な領域の高みを目指し、自分の限界以上の能力を発揮しないといけないですね。たとえばゴロのボールを捕るにしても、跳ねてきたり転がってきたり、すぐそばまで転がってきたのにいきなりボーンって跳ねたりするでしょう。そんな気合いや努力では対処しきれないですよ。本能の部分というか予測する能力というか、言葉にできない教えることのできない技術が必要なのです。こういう場合はこうするとか、教科書に書いてあればいいのにとよく思いましたよ(笑)。

その後、日本語教師養成学校に通われ、日本語教師としてオーストラリアに渡られたのですよね。

ええ、野球つきの日々から解放されたとき、僕は抜け殻のようになってしまいました。なにもする気がなく先が見えない、とにかく野球から離れたかったと思います。野球をすることはもちろん、関わり合うことも辛かったのです。そこで、あまり野球が盛んではないだろうという考えでオーストラリアに渡ったのです。ところが、オーストラリアの人は総じてスポーツが大好きなんですよ。僕が野球の選手だったと言ったら、みんなが教えてくれと言ってきたんです。初めは気乗りしなかったのですが、ボロボロの用具で楽しそうに野球をしている子供たちと接しているうちに、野球の、そしてスポーツ本来の楽しさを思い出すことができたのです。その体験が今の職業に就ききっかけとなったのです。

プロ選手の要素とは 合理的な動きと客観的視点

現在はスポーツライターとしてスポーツを伝える立場に立たれているわけですが、客観的に見て、プロ選手に必要なこととはなんだと思いますか？

合理的な動きを追求する姿勢ですね。たとえば、手を横に振りながら走る女の子に、そのスタイルで42.195kmを走れと言っても、走りきれぬかどうか？ まずは進行方向に、手を前後に振ることが必要です。けれど40kmを走り抜くためには、それだけ直してもだめですよ。首の角度や腕の振り方など、動き全てにおいて走りにも最適したスタイルで走らなければなりません。合理的な動きを追求するということは、動きの無駄を取り除くということです。

そのためには自分の無駄な部分を認識していなければいけませんよね。

もちろん、そういうことです。膨大な練習を通じて途方もない量の無駄を体験し、理解してこそ、ようやく自分のものにできるのだと思います。自分を徹底的に客観視するというのも、プロフェッショナルな選手に必須の条件です。たとえばイチロー選手(注2)などは典型的ですね。彼は、自分自身を完全に第三者の目で見つめることができる、希有な選手ですよ。彼こそ真のプロフェッショナルですよ。

たしかに、イチロー選手の発言は分析的でクールなところがありますね。

メディアに登場する姿を見ると、ストイックすぎるくらいのクールな印象を抱きがちですが、選手としてすごく素直なあり方だと思いますよ。「この間のホームランは、気合いでがんばりました！」なんて言ってくれたらマスコミ的には面白いのでしょうか(笑)。でも彼は、選手としての自分を正確に客観的に認識し、それを視聴者に包み隠さず話してくれているわけです。自分の負の部分とも真正面から向かい合って把握できるからこそ向上できるんですね。

客観的視点もプロとしての重要な要素なのです。

自分を客観的に見る手段として、写真やVTRで自分を見るということも効果的です。第三者の視点で自分を認識することができますし、自分の思い込みが明らかにわかります。(バットスイングをしてみせて) こうやって、自分では水平に振っているつもりでも、写真や映像でチェックしてみると初めて、実は右肩が振っているということに気づいたりね。

※ 注2

イチロー選手=本名：鈴木一朗。愛知工業大学名電高校からドラフト4位でオリックスに入団、7年連続首位打者となる。3度のリーグMVP受賞、7年連続ベストナインに選出され、7年連続ゴールドen・グラブ賞を受賞する。2000年11月フリーエージェントとしてシアトルマリナーズに移籍。2001年アメリカンリーグの首位打者、盗塁王、新人王や日本人初のMVPを獲得した。



松井選手が所属するニューヨークヤンキースの春キャンプの取材にきました。ブルペンに写る影は撮影者(青島)です。



フロリダ州タンパにあるホームグラウンド、レジェンド・フィールド球場のチケット売り場。

確実に、簡単に撮れるデジタルカメラ 『行動と歩調が合うことが魅力』

取材時にはカメラを持参されるのですか？

いつもではありませんが、持って行く機会は多いです。撮った写真を記事に掲載する場合がありますからね。取材現場では、僕はわりと選手の近くまで行けることがあるので、その記事のイメージ写真などを撮ってきてほしいとカメラを渡されることが多いのです。もちろん許された範囲の中の撮影にはなりますが。

それ以外にも、記事を書く際の記憶を助ける記録としても使用しています。選手の様子を撮影することもあります。グラウンドがどんな感じだったとか、空がどんな感じだったとか、その時の雰囲気をつかめるような写真もよく撮影します。もちろん、強く印象に残ったことを記事にするわけですが、写真を撮っておくことで細かい部分まで思い起こしながら書けるので、すごくありがたいですよ。

その際使われるのは、フィルムカメラですか？それともデジタルカメラですか？

昔はフィルムカメラで撮影していましたが、今はデジタルカメラです。最近インターネット上のホームページなどに載せる記事も多いので、デジタルカメラが何かと便利ですよ。

デジタルカメラが使われるようになった理由というのは他にありますか？



フェンス越しに松井選手の通過を待つファンたち。

デジタルカメラは、撮影者に「動きながら撮る」自由を与えてくれるツールだということです。まず軽いし、簡単に撮ることができる。取材中は動き回っていますから、フィルムカメラのように一回一回フレームをのぞいて構えてという手間が結構ネックになるんです。それにフィルムカメラは撮影可能枚数も限られているでしょう。だから一枚一枚を慎重にならざるを得なくなる。でも、デジタルカメラなら、いらぬ画像をその場で削除してゆけばいいわけですから、枚数も気にすることなく好きなときにシャッターが押せるのです。

それに、素人でも確実に撮れるようになりましたよね。フィルムカメラの精度とはまた違うのでしょうか、そこで見たものをきちんと記録してくれる。室内の撮影なのにスピードライトを使わなくてもすんでしまうことも多いので、とても助かります。

取材においては、簡単に確実に撮れるということ、そしてフットワークの軽さが重要になってくるのですね。

そうです。それに、気持ちの面でも負担がなくなりました。フィルムカメラを持ち歩いていたときは、「撮らなきゃいけない」という意識が働いていたような気がします。たとえば、旅行に出かけても、有名な建物の前では必ず記念撮影を撮らなくちゃとか、あっちもこっちも写真に撮っておきたいという気持ちが大きくなってしまふことってありますよね。それよりもまず、自分の目でよく見て楽しむことの方が大切なのに。取材だって、写真を撮ることよりもその場でよく見て感じる事が大事なわけですから。

デジタルカメラの場合、そうした気持ちの負担がなく、現場を感じながら撮れるということですか？

ええ、いろいろと歩き回りながら、気軽にパシャ、パシャと撮ることができる。やはりこの手軽さがいいのでしょうか。僕にとって行動と歩調が合うという点がデジタルカメラの一番の魅力なのです。

なるほど。自分のリズムで撮ることができるということですね。

最近では取材陣の中でもデジタルカメラ使用者は増えてきていますよ。以前は、カメラマンが撮り終えたフィルムをすぐに現像に出すために、今か今かと待ち構えているアシスタントの姿をよく見かけましたが、今はカメラマンがデジカメで撮ったらその場で自分のパソコンに取り込んですぐに編集部などへデータを送ったりしていますからね。便利になったと思います。



大の大人もネットにしがみついております。お目当ての選手を追っています。



球場で発見。松井選手にちなんで寿司(?)弁当。“SUSHI #55”。



松井選手の記念すべき第一号ホームランボールが沈んでいる池。誰も取りに行かないという理由が見てわかりました。汚いんです(笑)。

公平な目でスポーツの魅力伝えたい



取材時に気がつかっていることは何ですか？

先ほども言ったように、その場でよく見て感じる事、そして選手に迷惑をかけないことですね。

写真を撮るといことが、迷惑になるということはありませんか？

それはあります。もちろん取材ですから、ある程度は仕方のないことですが、急にスピードライトをたいたり、写真ばかり撮っている取材者を嫌がる選手もいます。選手に迷惑をかけることだけは絶対にしたくないですから、そのあたりには気を使います。そういった点でもデジタルカメラはいいですよ。シャッター音が静かなうえにスピードライトも派手でないから、撮る相手にびくつきさせなくて済みます。小さいから圧迫感もありませんし、毎回、「あっ撮られた」という感じがしないから、撮られる方も自然体でいられるようです。

スポーツライターとして気がつかっていることはありますか？

野球を長くやってきましたから、それ以外のスポーツを野球に置き換えて説明してしまうことがあるんですよ。僕に限らず野球好きな人って、とかく、他のスポーツの話は「野球で言え

ば……」と例えたりしがちだと思うんですよ。野球に例えて説明したりすることは、野球好きにとっては簡単なことですが、そういう方向に安易に流れないよう、できる限り努めています。

逆に野球選手の経験が役に立つ場合もありますよね？

もちろんありますよ。体力面でも精神面でも、選手をやってきたからこそ理解できたり、予測がついたりすることも多いです。ただ、思い込まないよう気をつけるようにはしています。野球ではこうでも、他のスポーツにそれがあてはまるとは限りません。野球だけに固執せず、公平な目でものごとを見つめていけたらと思います。

これまで、多方面からスポーツを見つめてこられた青島さんの考える、スポーツの面白さは何でしょうか？

たとえば、僕の入った高校の野球部は、1年生が入部するまで部員が10人しかいない弱いチームでした。ところが最終的には関東大会に出て、甲子園を目指すチームにまで成長しました。確かに高校生の吸収力ははずば抜けていますから、練習すればそれだけぐんと伸びる時期ではありました。ですがその伸びというのは、やはりスポーツならではのものだと思うのです。昨日と今日が違う。そういう伸び方をするんですよ。

甲子園を目指すチーム、ましてや優勝を狙うようなチームでもっとたくさんの奇跡やドラマが起きています。他のスポーツでも然り。そのことに人は感動を感じるのでしょうし、それがスポーツの面白さであり、素晴らしさだと思います。もちろんいくら練習を積んだからといっても、それだけで勝てる世界でもありません。ですがそれも人がスポーツに夢中になる理由のひとつなのでしょうね。

なるほど。今後も、スポーツの楽しさを現場から直球で届けてくださることを期待しています。本日はお忙しい中どうもありがとうございました。

＞ コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

